

「松下アジアスカラシップ」詳細

助成番号	研究テーマ（留学目的）		
	留学国	留学機関	留学期間
	氏名	所属	区分
01-002	チャクマ語の記述研究 共時態から通時態へ		
	バングラデシュ	ダッカ大学現代語研究所	
	藤原 敬介	京都大学大学院	院生博士

研究テーマ（留学目的）の説明（助成決定時のテーマ。文責は本人）

チャクマ語はバングラデシュ人民共和国・チッタゴン丘陵を中心として、近隣のインド、ミャンマーの一部などでチャクマ族によって話されている言語である。母語話者数は全体で 50 万人程度であると推定される。チャクマ族に関する研究の中で簡単な語彙や文が紹介されることはあっても、チャクマ語についてのまとまった研究はまだない。

チャクマ族は形質人類学的にはモンゴロイドに属する。しかしチャクマ語は言語学的にはインド・アーリア系であり、ベンガル語東部方言の下位方言とするのが定説である。しかしながらチャクマ語が話される地域は、有史以前からチベット・ビルマ、オーストロ・アジア、インド・アーリアの諸民族が相互に接触を続けてきた地域であり、土着のアニミズム、ヒンドゥー教、仏教に加えて、13 世紀以降はイスラム教の影響も無視できなくなった地域である。これらの諸民族・諸文化は、言語にも強い影響を与えているものと思われる。

本研究テーマである「チャクマ語の記述的研究---共時態から通時態へ」は、現代チャクマ語の記述を通して、その歴史的変化の解明を目指すものである。ただし、比較言語学が一般に行うような、音韻対応と類推に基づく規則的な変化ばかりではなく、上に述べたようなこの地域に特有の民族・宗教の接触にともなう言語変化も視野にいられた記述が目標である。このような研究は言語領域の研究として知られ、インドの言語領域論が特に有名である。しかしバングラデシュを中心とした地域の言語領域論は、いまだに試みられていない。

申請者はこれまでの研究で、現代チャクマ語のアクセントを観察・記述することを通して、それが通時的には有気音に後続する母音のピッチが高くなることにより生じているという特徴を明らかとした。通言語的には無声有気閉鎖音に後続する母音のピッチは高く、有声有気閉鎖音に後続する母音のピッチは低くなることが知られているのに対し、チャクマ語ではいずれの場合も母音のピッチが高くなるところが興味深い。同様の特徴はベンガル語チッタゴン方言にもあることが報告されている。有気音の消失と高ピッチアクセントの発生は、この地域の言語の特徴の一つとしてあげられる可能性がある。

今後はチャクマ語音韻論の研究をさらに進めつつ、まだ調査が十分に進んでいない形態論・統語論の記述を集中的に行い、チャクマ語の文法記述とバングラデシュ言語領域論を提示する基盤としたい。

成果報告

。

今回の留学中に発表した論文等につきまして報告します。留学中に以下の論文等を発表いたしました。

1. 「言語民主主義から言語帝国主義へ—少数言語からみたバングラデシュの言語問題—」
『社会言語学』II、103-121.
2. 「チャクマ文字の現在」『遡河』第13号、20-24.
3. 「チャック語の音声に関する考察」『京都大学言語学研究』第21号、217-273.
4. 「ムル人の文字」『遡河』第14号、77-81.
5. 「マルマ語の音声に関する考察」『京都大学言語学研究』第22号、237-300.
6. “Tone sandhi in Chakma and Cak”, The 36th International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics, 2003/11/28-2003/11/30, La Trobe University, Melbourne, Australia.

内容を簡単に紹介いたします。

1 はバングラデシュの独立とふかい関係のあるバングラ語運動と国際母語記念日について紹介し、その影でまったくかえりみられていないバングラデシュ国内の少数言語について論じたものです。附録としてバングラデシュの少数民族一覧をつけました。

2 はチャクマ文字について紹介したものです。基本字母とチャクマ文字による五十音図もつけました。

3 はチャック語の音声を共時的に記述し、分析したものです。附録としてチャック語基礎語彙 1000 語をつけました。

4 はバングラデシュの少数民族のひとつであり、チッタゴン丘陵にもっともふるくからいるとされるムル人のムル文字について紹介したものです。基本字母とムル文字による五十音図もつけました。ムル文字についての論考はおそらく世界でもはじめてのものでしょう。

5 はマルマ語の音声を共時的に記述し、分析したものです。さらにビルマ語との通時的な比較もこころみました。附録としてマルマ語基礎語彙 1000 語をつけました。

6 はチャクマ語とチャック語にみられる変調(アクセントの交替)が、実は類似した原理によっておこなわれているということを論じたものです。そして高声調が連続すると一方が低声調となるようなアクセント変化規則がチッタゴン丘陵を中心とした地域の言語の地域特徴のひとつである可能性があるかと指摘しました。

まだ発表するにはいたっていませんが、チャック語で五十編、マルマ語で四十五編ほどのテキストを収集しました。

チャック語の民話についてはバングラ語で発表されたものが一編あるだけで、その実体はほとんど知られておりません。チャック語で発表されたものについては皆無です。まだコンピューターへの入力がすべては終了しておらず、文法解釈が十分にはできていません。チャック語の音声学・音韻論についてはすでに論文として発表したもので、今後は収集したテキストの分析をすすめながら、チャック語の文法を記述したいとかがえております。単に文法を記述するだけでなく、収集したテキストそのものを、言語学的手法で分析し、文法解釈を提示したうえで、発表したいともかがえております。また、機会があればバングラ語にも翻訳して、バングラデシュにチャック人という少数民族がおり、彼らにも独自の民話の文化があることをひろくバングラデシュのひとびとにもつたえることができるとかがえております。

マルマ語につきましては、チャック語にくらべますと、バングラ語で紹介されている民話がいくらかあります。しかし、マルマ語のテキストを言語学的方法によって分析し、マルマ語として発表したものはいままでにひとつもありません。マルマ語につきまして、テキストの分析をもとに文法を記述したいとかがえております。さらに、テキストそのものの整理もすすめ、チャック語と同様に、文法解釈をほどこし、将来的にはバングラ語にも翻訳して発表したいとかがえております。

研究課題にふくまれるチッタゴン丘陵を中心とする言語領域について報告いたします。採用時にすでにわかっていた弁別的アクセントにくわえて、音声面では入破音、統語面では動詞に後続する方向接辞などが、これまでのインド言語領域論では論じられてこなかった特徴として提示できそうであるみとおしがたちました。この点につきましてはまだ論文のかたちで発表するにはいたっておりませんが、ちかい将来に成果をまとめて発表したいとかがえております。

二年の留学期間はながいようでみじかいものでした。この間、すこし体調をくずしたこともありましたが、とにかくも無事に留学生活をおえることができました。

当初するはずであったチャクマ語から、より調査の緊急性がたかいチャック語に重点をうつし、それにとまってマルマ語の調査も開始したことで、ひとつの言語を集中的にするということはできませんでした。しかし、チャクマ語だけをしていればきづかなかったであろう言語現象に、チャック語やマルマ語をすることで気づくことが多々ありました。チャクマ語の記述そのものはそれほどすすみませんでした。将来的にこの地域で研究を

つづけていくためには、チャック語とマルマ語を調査することができて本当によかったとおもいます。

以上をもちまして、簡単ではありますが、留学の成果報告とさせていただきます。松下アジアスカラシップ奨学生として二年にわたりバングラデシュに留学する機会をあたえていただきありがとうございました。